まとめ

今回の調査の主な目的は、孕み出している石垣の内部、根石等の状況を確認し、原因を解明することにありました。発掘調査を進めると同時に、原因を探るための地質調査、三次元測量調査なども行いました。これらを総合的に検討した結果、孕み出しの原因としては、基礎地盤の不安定さが可能性として考えられます。しかし、昭和39年に崩落した部分についても、基礎部分の改変はみられないことや、現在の状況で石積みが安定していることも考慮に入れながら、定点測量等を実施するなど、引き続き慎重に観察を続けていくことが重要であると考えています。

写真14　現在の東側法面石垣

石垣が明瞭に見えるようになりました

前号に引き続き、東側からみた津山城の景観を紹介します。

史跡津山城跡整備事業とは別に、公園緑地課により、鶴山公園の樹木保存管理計画が平成20年度に策定され、平成21年度から津山城跡内の樹木について伐採、整理が行われているところです。

今年度は、昨年度伐採、整理を行った宮川に面した斜面、及びその北側と南側斜面の樹木伐採を行いました。これにより、津山城の石垣が以前よりも、よりはっきりと見えるようになりました。

写真17　東側上空から見た津山城の様子

写真15　昭和40・41年の修復工事（その1）

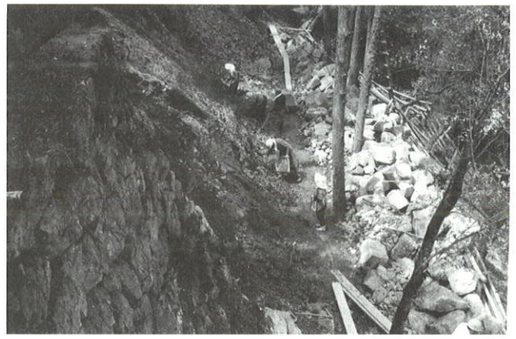

写真16　昭和40・41年の修復工事（その2）

また、伐採した箇所にはあらたにヤマザクラの植樹を行いました。今後も公園緑地課による城内樹木の整備が行われる予定です。

写真18　北東側上空から見た津山城の様子

津山城だより No.15 2011年3月
TSUYAMAJODAYORI
津山市教育委員会 文化財課

発行年月日　平成23年3月31日
編集・発行　津山市教育委員会
文化財課
〒708-0824 岡山県津山市沼600-1
ＴＥＬ　(0868) 24 － 8413
印　　刷　廣陽本社

津山城だより
TSUYAMAJODAYORI
No.15 2011年3月
津山市教育委員会
文化財課

七番門虎口通路、多聞櫓腰石垣上面の土系舗装が完了しました

七番門は、天守曲輪から一段低いところに西向きに開口する門です。平成21年度は、北面石垣を解体修理し、東面石垣と南面の雁木を復元しました。22年度は、昨年度に引き続き、七番門周辺の整備を行いました。

七番門の発掘調査では、門の礎石が2石残っていたことが確認されており、この礎石を露出展示し、周囲を土系舗装にするという方法で整備を実施しました。また、多聞櫓腰石垣の上面及び七番門南側櫓台の部分は、雨水の浸透を防止するため、天端面の土系舗装を行いました。

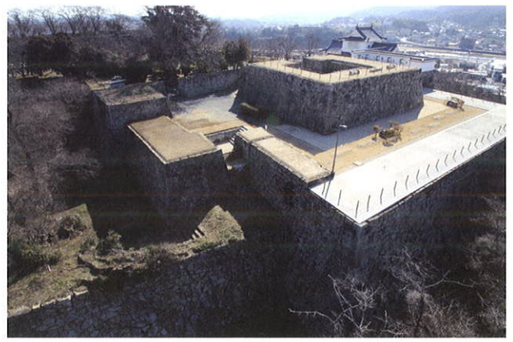

写真1　整備を完了した七番門虎口（北西から）

写真2　整備前の多門櫓腰石垣（南から）

写真3　整備後の多門櫓腰石垣

写真4　発掘調査時の七番門虎口（東から）

写真5　整備後の七番門虎口

東側法面石垣の発掘調査を行いました

津山城の東側、宮川に面した部分に、本丸で最も高い月見櫓石垣があります。その東側に、高さ約７ｍ、南北約 66 ｍに及ぶ腰石垣があります。この石垣は、昭和 39 年６月の集中豪雨により、幅 24.5 ｍ、高さ９ｍにわたり崩壊したため、翌 40、41 年の２ヶ年に渡って積み直しが行われました（写真 15・16）。

平成 22 年度の発掘調査では、積み直しを行っていない地点に２箇所（トレンチ１、２）、昭和 40、41 年に積み直している地点に１箇所（トレンチ３）、孕み出している部分に１箇所（トレンチ４）の合計４箇所に調査区を設定し、発掘調査を実施しました（図１、写真 6）。

トレンチ１

東側法面石垣とその西側の雁木（石段）部分の石垣との間の裏込の状況を確認しました。この調査区の北端には、大正 15 年に建設された幕末の志士、井汲唯一、植原六郎左衛門を顕彰する銅碑が設置されていましたが、戦時中に軍需物資として供出されたことにより、今は碑の基礎部分と、碑に通じる敷石が残っているだけです。トレンチの中心にあるのがこの敷石です。このトレンチでは、法面石垣と、雁木東側の石垣まですべて栗石が充填されていたことが分かりました（写真 7）。

また、西側の雁木は、現在北側にある管理道ができる以前、管理道として一時使用されていたため、発掘調査前は土に覆われた状態でしたが、今回の調査でそれらを取り除き、江戸時代の絵図にも描かれている雁木を表出させました（写真 8）。

トレンチ２

裏込の栗石、及び月見櫓の石垣から東側法面石垣にかけての岩盤、盛土の状況を確認するため、孕んだ石垣法面の内側に設定したトレンチです。ここでは、月見櫓の石垣が、地山である岩盤上に直接築かれていること、そこから地山が急勾配で東に向かって下がっていることなどが分かりました（写真 10）。また、このトレンチは石垣に開口している排水口にあたる箇所であり、掘削を進めたところ、木製の枡の痕跡が検出されました（写真 11）。木製の枡は、これまで津山城本丸御殿や、裏中門などでみつかっています。木質の部分は腐食していましたが、板を繋ぎあわせるための鉄釘の出土状況によって、枡の大きさを推定することができました（図２）。これによると、枡の大きさは、東西４尺（約 1.2 ｍ）、南北３尺（約 90 ㎝）、高さ１尺（約 30 ㎝）に復元されます。

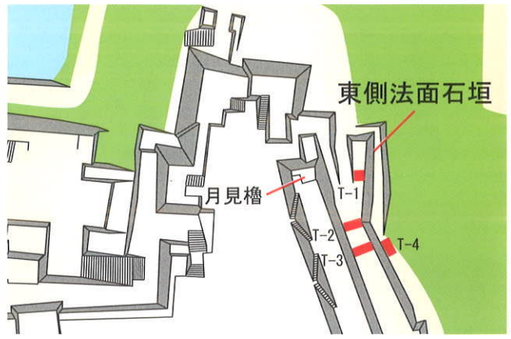

図１　調査区位置図（上が北）

写真６　東側法面石垣とトレンチの位置

写真７　トレンチ１（北から）

写真８　トレンチ１北側の雁木（北から）

写真９　トレンチ２・３（西から）

写真 10　トレンチ２盛土の状況（南東から）

写真 12　トレンチ３（南西から）

トレンチ３

トレンチ２から６ｍ南、昭和 40、41 年に積み直しを行った部分に設定したトレンチです。土層をみると、地山、旧表土、築城時の盛土が確認できましたが、大部分は廃城以降、あるいは昭和の積み直しによるものと思われる裏込の状況が確認できました。

トレンチ４

孕んだ石垣の最下部の状況を確認するために設定しました。現地表面から約２ｍ下がったところに、石垣の基礎が築かれていることが分かりました。最初に地山を掘り込み、底面に河原石を敷き、その上に石垣を築くという構築法が確認されました。このような工法は「堀り込み地業」と呼ばれているもので、これまでに天守台石垣・腰巻櫓台石垣の調査でも確認されています。

写真 11　トレンチ２木製の枡の痕跡（南西から）

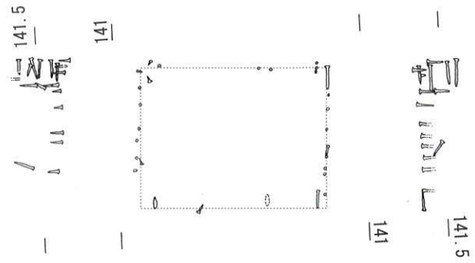

図２　鉄釘出土状況（点線は枡の大きさを復元・S＝1/40）

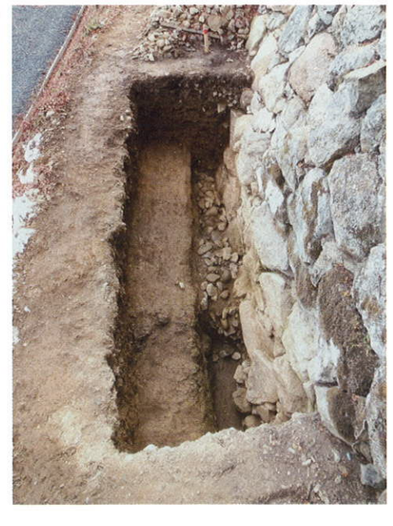

写真13　トレンチ4(中央のラインが地山の堀り込み)